

## 6月3日 三位一体の主日

箴 8:22～31    ロマ 5:1～5    ヨハ 16:12～15

### 1. ヨハ

v.13-14 「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。」

カトリック教会は、一方ではローマ教皇を頂点とする聖職位階制度によって組織された地上の宗団であります。同時に神の国の相続人であって(ロマ 8:17)、天の故郷を熱望している(ヘブ 11:16) “キリストにおけるいわば秘跡” であります(教会憲章 8)。この教会は、主キリストの十字架の死による罪の赦しの福音の上に立っているだけではなくて、「これから起こること」(v.13)を待ち望んでいます(ロマ 8:21-25)。

聖霊は、キリストによる救いの業の記念祭儀であるミサが“ことばとしるし”によって行われるとき、私たち一同を訪れて、共同の信仰宣言へと導いてくださいます。聖霊は、キリストの死による贖いの出来事から離れて、それぞれの時代に応じた別の新しい何かを啓示するとは考えてはなりません。

ミサにおける聖体拝領が、以前には恵みを受けるための個人的信心としてだけ理解されていたものを、典礼憲章はその共同体性を強調することによって、全信徒の充実した行動的参加を呼びかけました(典礼憲章 11,26,27)。奉納祈願から交わりの儀の間ずっと会衆が立っているようにとの指示があるのは、この会衆が神の国の相続人の共同体であるとの心情を、育むためなのです(ミサ典礼書の総則 20,21)。

父なる神は私たちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました(1ヨハ 4:10)。このことを私たちに悟らせてくださるのが、父のもとから出る真理の霊(v.13)です。ですから聖霊が、ことばの典礼によって信者に聖書の宝庫が開かれる(典礼憲章 51)ためにも、訪れてくださることを私たちは信じるようにと求められているのです。「十字架の言葉」と結びつかないような“講話”は、残念ながら聖霊と何の関係もないことを知りましょう(1コリ 1:18, 2:1-5 参照)。

### 2. ロマ

v.2 「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光に与る希望を誇りにしています。」

父なる神は御子キリストと聖霊を世に遣わして、“秘められた計画”を明らかにしてくださいました(今朝の集会祈願／神のいのちの神秘)。「その計画とは、あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の希望です」(コロ 1:28)。

私たちは、“以前は神から離れ、…… 神に敵対していました”(コロ 1:21)が、キリストによって父なる

神との間に平和を得て、神の国を受け継ぐ希望を与えられました。このような“福音の希望”(コロ1:23)を私たちに悟らせてくださるのが、聖霊の働きです。

このように、三位一体の教理は教会の生きた体験から導き出されたものであって、歴史の教会はこの教理によって多くの異端と戦って来ました。そして、その戦いは現代においてもなお必要とされています。なぜなら、いつの時代にもキリストの福音の誤った解釈、使徒たちが告げ知らせたものに反する福音(ガラ1:8)が、私たちの教会に混乱と動揺を及ぼしているからです。現代人は、三位一体の教理を確立したニケア会議やカルケドン会議の時代の教父たちと、全く同じ哲学様式によってものを考えることは出来ませんが、それでも当時の諸信条を学ぶことは大いに有益です。それらは現代のキリスト者が、そこで使徒たちの伝えた聖伝に触れる一つの重要な源泉だからです。

### 3. 箴

御子キリストの福音と共に働く聖霊は、かつては“世の知恵”が知らなかった“神の知恵”を、明らかに示して下さいます(1コリ1:20-25)。キリストの福音が正しく宣教されるときには、聖霊が共に働いてくださるのです。そして世の始まる前から天の父が定めておられた“神の知恵”を、私たちに理解させて下さいます(1コリ2:6-16)。

福音の宣教とは、その時代に応じた新しい知恵を教会が提供することだと考えるなら、それは間違っています。「主は、その道の初めにわたし(神の知恵)を造られた。いにしへの御業になお、先だって」(v.22)という旧約聖書の言葉を受け入れた上で、使徒パウロは宣言しました。「キリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。」(1コリ1:30)

現代の教会が、正しく使徒たちが伝えた福音を宣教することによって、唯一の神、父と子と聖霊の栄光をたたえることが出来ますように(今朝の拝領祈願)。                      ハレルヤ、アーメン。

## 6月10日 キリストの聖体

創 14:18～20    Iコリ 11:23～26    ルカ 9:11～17

### 1. ルカ

v.13 「イエスは言われた。“あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。”」

使徒たちとは、イエス・キリストの死と復活による福音、神の国の福音の、証人また宣教者として、主御自身によって遣わされた人々でありました。原始教会の初期のミサで、使徒たちは救われた人々に御聖体を授け、神の国の福音を告げ知らせました。そして間もなく各地の教会には、新約聖書で“長老”とか“監督”と呼ばれている人々が任命されて、使徒たちの務めを受け継いで初代教会を形成して行きました。

教会の宣教は、主が使徒たちに委ねられた宣教の継続であることを、よく理解する必要があります。歴史の教会の、各時代の司教たちは、使徒たちの後継者であって、決して自らが先代に代わって使徒になった訳ではありませんでした。彼らは、かつて主が“あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい”と言って弟子たちに委ねられた使徒職を継続するのであって、決して新しく再び“あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい”という主からの声を、独自に聞かされたものではありません。

現代には現代という状況の中での新しい福音があると考えて、かつて主から使徒たちに委ねられたものとは別な“現代的な福音”を主張することが、インカルチュレーション(福音の文化内開花)であると思っはなりません。

原始教会の使徒たちは、「至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした」(9:6)のですが、それは彼らを通して働く復活の主御自身の御業であったという理解が、v.11には表現されています。「あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能」(9:1)は、使徒たちの時代に特徴的なものであって、それは使徒の後継者たちには受け継がれませんでした。しかし、福音の宣教、すなわち神の国を宣べ伝えることは歴史の教会に受け継がれて、今日に至りました。

### 2. Iコリ

教会は、キリストの祭壇を囲んで共にミサをささげる民の群であって、ミサの祭儀はキリスト者の生活全体の中心であります。私たちキリスト者の生活のすべては、ミサに結ばれ、ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられています(ミサ典礼書の総則 1)。それはキリストの死と復活の記念であって、感謝の典礼(その中心はいけにえの奉献と拝領)はことばの典礼(その中心は聖書の朗読と説教)と固く結びついています。

司式者と会衆が共にキリストの聖体を拝領するとき、「主が来られるときまで、主の死を告げ知らせる」(v.26)のだということに、注目しましょう。

過去にカトリック教会では、どちらかという聖体拝領を個人的信心として、各自が恵みを受ける手段として強調していました。しかし今日、カトリック教会は典礼刷新によって、これを共同体の信仰告白として理

解するようになりました。奉納祈願から始まって、交わりの儀の間、すべての信者の拝領が終わるまで、会衆は立っているようにと指示されているのは、この共同体がキリストの血によって贖われた神の国の民であるということの表現だからです(ミサ典礼書の総則 20,21)。

拝領前の信仰告白は、司式者の拝領と会衆の拝領が分離されないようにとの配慮によるものであり(コンクマン「ミサ」p.259)、拝領の歌を“司祭が拝領するときに始める”と指示されているのも(総則 56リ)、集会の共同体性と一致を表現するためなのです(同 20)。

これが使徒自らが主から受けて、歴史の教会に伝えた“ミサ理解”であることを、私たちは今朝再び、聖書を通して聞いているのです(v.23)。

### 3. 創

メルキゼデクは、伝説上の祭司であって、パンとぶどう酒を持って来てアブラハムを祝福しました。主イエスは復活して天に昇り、“永遠にメルキゼデクと同じような大祭司”となりました(ヘブ 6:20)。ですからミサでは、復活して生きておられるキリスト御自身が、ことばの典礼を通して会衆に語りかけ、感謝の典礼で御自身を永遠の命の糧として与えようとされるのです。

教会は、ナザレのイエスに関する古い昔の伝説によって歩んでいるわけではありません。そうではなくて、“常に生きていて、人々のために執り成しておられる”(ヘブ 7:24-25)大祭司イエス・キリストによって、歩んでいるのです。

「教会がキリストの死と復活の記念を行うとき、救いの力がわたしたちのうちに働きます」というレオ秘跡書の教義が、現代のキリスト者の体験となるためには、“使徒たちの福音”に信者一人一人が耳を傾けることが切に求められます。

「主のからだを受け、救いの力に与るわたしたちが、主の死を告げ知らせることが出来ますように。」(今朝の集会祈願)

ハレルヤ、アーメン。

## 6月17日 年間第11主日

サム下 12:7～13 ガラ 2:16～21 ルカ 7:36～8:3

### 1. ルカ

8:1 「イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。」

共観福音書におけるイエスの宣教の支配的な主題は“神の国”であることに、異論をとねえる人はいないでしょう。しかしこの“神の国”という言葉は、実際には新約聖書が語っているのとは全く違う意味で、しばしば誤って解釈ないし理解されて来ました。

福音書においても、使徒たちの文書においても、“神の国の福音を告げ知らせる”とは、神が与えてくださる罪の赦しを宣教することであって、人々を悔い改めに招くものであると理解されています。7:49-50から私たちは、福音書を生み出した原始教会の“キリスト理解”を読みとることが出来ます。原始教会の福音宣教に主力となって奉仕したのは、“神に多くの罪を赦された”から“神を多く愛する”人々でありました。

### 2. サム下

ダビデ王が、ヘト人ウリヤの妻であったバト・シェバに横恋慕して、これを我がものにするために、軍の司令官ヨアブに命じてウリヤを戦死させた物語りは、現代人にも大いに興味を抱かせるドラマの主題となり得るものです。通俗的には、人々は今日的な感覚で、登場人物たちの心理や感情を推測しながら読んでしまうために、古代オリエントにおける王の権力の特殊性を考慮することはありません。しかしこの物語りの本来の主題は、イスラエルの神ヤーウエの行為であって、登場人物たちの様々な行動や運命はこの主題のために副次的に描かれているに過ぎないのです。

王ダビデの罪は、道徳上の罪でも人道上の罪でもなくて、“ヤーウエの言葉を侮った”(12:9)罪でありました。罪とは、何か間違ったり道をそれたというようなことではなくて、積極的に、意図的に、神に背くこと(12:9)なのです。そして王は「わたしはヤーウエに罪を犯した」と告白し、主がその罪を取り除かれます(v.13)。罪が告発されるのも、その罪が取り除かれるのも、すべては神の業なのです。

ダビデ王が反省して、以後清く正しい人間になったなどというような展開は、この物語りでは何も期待されていません。彼の犯した罪への罰として、産まれてくる子が必ず死ぬと宣告されたにもかかわらず、そうなるまでには、彼はヤーウエの憐れみを求めることを止めませんでした。現代人はこれを“厚かましい態度”と思うかも知れませんが、この物語りの主題は徹頭徹尾神の業であって、人の業ではないのです。

### 3. ガラ

v.16 「けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義とし

ていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。」

“福音を聞く”ということが、直ちに“多くの罪を赦された”(ルカ7:47)ということと結びつかないなら、その人は信仰によって歩んでいると言えるでしょうか。「わたしは、キリストと共に十字架に付けられて」「律法に対しては死んだ」(v.19)ということ、現代のキリスト者は再び理解しなければなりません。それが洗礼の秘跡が意味しているものだからです。

神の国を、人々がイエスの教えを基礎にして実現する、ある種の地上の理想社会のことだと考えて、人間の努力と進歩によってこれを実現出来るという幻想を抱いている、そんな理解が一方にはあり、また他方、人々が心の中に神の支配を受け入れる共同体としての教会を、神の国と同視する傾向も存在します。現代のカトリック教会の信者の多くは、このような通俗的なキリスト教理解によって歩んでいるように見えます。しかし聖書は神の御業を、神の側からの一方的な罪の赦しを、救済史の主題として語っているのであって、人間の側からの応答と神御自身の御業とを混同してはなりません。

「人間が応答してもしなくても神の支配は存在する。もちろん、神の支配は人間の服従を要求する。しかし、この要求が下される前にも、神の支配は存在し、人間がそれを拒否しても、なお存在するのである。」(ハンター／新約神学入門 1957年)

イエス・キリストの十字架の死によって、私たちは贖われ、罪を赦されました(エフェ1:7)。それは信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためです(ヨハ3:16)。私たちは福音を通して、神の国を受け継ぐ希望を与えられました(エフェ1:18、コロ1:5)。「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」(コロ1:23) 現代のキリスト者が、信仰によって生きる(v.20)ことを、今朝もミサを通して天上のキリストは呼びかけておられます。人の言葉ではなくて神のことばを聞く者、そしてキリストの肉を食べその血を飲む者たちは幸いです。キリストはその人を終わりの日に神の国に復活させていただきます。

ハレルヤ、アーメン。

## 6月24日 洗礼者聖ヨハネの誕生

イザ 49:1～6 使 13:22～26 ルカ 1:57～80

### 1. ルカ

vv.63-64 「父親は字を書く板を出させて、“この子の名はヨハネ”と書いたので、人々は皆驚いた。すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた。」

新約聖書は、私たちが洗礼者ヨハネを救済史との関わりの中で理解するように、物語っています。ザカリアは最初、“時が来れば実現する救済史の出来事”を信じなかったため、口が利けなくなっていました(1:20)。しかし、彼が神の救済史を受け入れて、男の子にヨハネと名付けたとき、彼の口が再び開き、舌がほどけて、神を賛美し始めました。

洗礼者ヨハネは、「主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせる」(vv.76-77)者として、誕生しました。ですから、救い主イエスから切り離しては、彼のことを正しく理解することが出来ません。事実、初代教会の福音宣教は、いつも洗礼者ヨハネの出現から語り始められました(使 1:21-22,10:37)。そのような意味で彼は、私たちすべての者が「主はその民を訪れて(罪から)解放し、我らのために救いの角を、僕ダビデの家から起こされた」(vv.68-69)ことを聞くために、福音伝承の中に立っているのです。

### 2. 使

「およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない」と、イエスは言われました(ルカ 7:28)。彼は預言者以上の者であったとさえ言われています(マタ 11:9)。しかし、彼はメシアではありませんでした。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方(イエス)について話したことは、すべて本当だった」(ヨハ 10:41)とは、初代教会の人々の信仰体験であったに違いありません。

「神は約束に従って、ダビデの子孫からイスラエルに救い主を送ってくださった」(v.23)、「この救いの言葉(福音)はわたしたちに送られました」(v.26)という救済史の出来事の中に、洗礼者ヨハネは“燃えて輝くともし火”(ヨハ 5:35)として現れて消えて行った人でした。

教会は、今も救済史の中を旅しています。その目標は神の国への復活と永遠の命です。キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とされました(1コリ 15:20)。私たちキリスト者の命は、今はキリストと共に神の内に隠されているのです。しかし、キリストが現れるとき、私たちも皆、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう(コロ 3:3-4)。その日に私たちが受ける栄光は、かつての洗礼者ヨハネの栄光よりも、さらに偉大なのです(ルカ 7:28)。「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、……聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているかを悟らせてくださるよ

うに。」(エフェ 1:17-18)

### 3. イザ

v.3 「あなたはわたしの僕、イスラエル、」

これは“僕の歌”の第二のものですが、“主の僕”と“イスラエル”とが同一視されていることに注目しましょう。実にイエスは、肉によるイスラエルがなし得なかったことを、イスラエルに代わって成し遂げてくださった“僕なるメシア”でありました。それは「ヤコブを御もとに立ち帰らせ、イスラエルを集める」(v.5) ためだけではなくて、「救いを地の果てまでもたらす」(v.6)ためでした。

「つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです」(ロマ 8:3)。「そのお受けになった傷によってあなたがたはいやされました。あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです」(1ペト 24-25、イザ 53:5-6)。

救済史は、その終わりの時に向かって確実に進んでいます。そこでは“神に従う人は信仰によって生きる”のです(ハバ 2:3-4)。そして、その福音伝承の物語りの始めに、今も洗礼者ヨハネは“燃えて輝くともし火”として立っています。教会は、今朝の「洗礼者聖ヨハネの誕生」の祭日にも、また8月10日の「洗礼者聖ヨハネの殉教」の記念日にも、同じ叙唱をその日のミサで用います。なぜなら、私たちは彼が指し示した「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハ 1:29)によって、永遠の命を得ている共同体だからです。

ハレルヤ、アーメン。